

愛・自然・恩寵 : C. S. Lewis, The Four Loves の 神学

東谷, 孝一
熊本保健科学大学保健科学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1854772>

出版情報 : 哲学論文集. 53, pp.55-72, 2017-09-30. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

愛・自然・恩寵

— C. S. Lewis, *The Four Loves* の神学 —

東谷孝一

はじめに

この論文は *The Four Loves* ⁽¹⁾ (邦訳『四つの愛』一九七七年、新訳二〇一一年) における C・S・ルイスの哲学的・神学的思索の意義について若干の考察をおこなうことを目的としている。この著作は人間の生にかかわる様々な愛をテーマとしているが、分量がコンパクトである上に、文体が会話調で親しみやすいため、一見したところ理解しやすい印象を与えるかもしれない。しかし、この印象は非常に疑わしいものと言うべきではないか。たしかに、この著作には人間的な愛が織りなす様々な現象についての鋭利で繊細な分析が満ちており、貴重な洞察が随所に見出される。しかしながら、この著作を通じて進展するルイスの思索の筋道を正確に追うことそのものが決して容易ではなく、ましてや著作全体を視野に収めながら、その核心的なメッセージが何であるかを探るためには、読み手は一層多くの努力を要求されるように思われる。ともあれ、この最終目標は言うなれば遙か彼方に望見されるにとどまっているのであり、以下ではまず、この著作の構成、および着眼点と目

愛・自然・恩寵

される事柄を示したい。

1 The Four Loves ヲソソ著作

四つの愛とは、Affection, Friendship, Eros, Charity (邦訳では、愛情、友情、恋愛、聖愛。新訳では、愛着、友情、エロース的愛、恵愛。)であるが、これらの分類の背景には古代ギリシア語の *στορνή φίλα, ἔρως, ἀγάπη* のコンセプトがかかっている。確かに、この著作の大きな魅力の一因は、愛というテーマに坎するルイスの深い学識であることは疑いえない。ギリシア・ローマ哲学やキリスト教神学、さらには古代から現代に至る諸々の文学作品についてのルイスの広範な知識が、叙述に奥行きと広がりを与えている。しかし、ルイスの関心は様々な論者の見解を単に披瀝することにはなく、聖書の教えを導きとし、先人に学びながら、愛について思索し反省し探求することにあつた。ではなぜ、思索し探求する必要があるのか。それはおそらく、ルイスは人間が生きるうえで、愛のあり方は私たちの生き方そのものを形作る根源的な働きを有すると考えていたからではないか。また、愛することは一方では、私たち人間にとつて自然な能力として言わば与えられたものでありながら、しかし他方では、それは改めて私たちによつて学ばれ修練されるべきことであるとルイスは見做していたからであるように思われる。私たちにとつてよく生きることを学ぶことは、或る意味では愛することを学ぶことであるとも言えるほど、愛は人間的生の中心に座している事柄であると考えられるのである。

ところで、四つの愛それぞれの特徴を顕在化させるルイスの手腕は極めて鮮やかであり、そこには愛の三つの形態の区別が大きく貢献している。それは、Gift-love, Need-love, Appreciative-love (邦訳では、与える愛、求める愛、鑑賞的愛。新訳では、与える愛、求める愛、評価的愛。)であり、これらの区別は愛する者と愛される者とを結合するものとしての愛が、両者を結合する仕方の違いによる区別であると考えられる。Gift-love の代表例として「父親をその家族の将来の幸せ(父親自身は

この幸せに与えることはないであろう)のために働かせる愛²」が挙げられ、Need-loveの例として「孤独な子どもに母親のぬくもりを求めさせる愛³」が挙げられている。これに対して Appreciative-loveは、対象が有する善さ・美しさが愛する者によって認識され、愛する者がその善さ美しさを享受する、まさにそのことにおいて成立している愛であるといえよう。

ところで、Need-loveが向けられている対象の善さや価値は、まさにその愛を持つ人の欠乏状態と相関的に成立している善である。したがって、欠乏が充足された場合、その人にとって求められていた当のものの価値は消失するのであり、愛もまた消失する。このような性質のNeed-loveに対して、愛とは与えることに本来の姿があると考える人は、Need-loveはLoveの名に値せず、利己心にすぎないとする主張するかもしれない。しかし、お互いが必要としている私たちの実際のあり方への反省にもとづいて、ルイスはこの主張に与せず、Need-loveもまた私の愛の大切な一要素と見なしている。このように私たちの愛にはNeed, Gift, Appreciationの三要素が働いていることを認めることによって、愛についてのルイスの分析は繊細で実り豊かなものとなっていると考えられる。

さて、この著作全体を通じてルイスが明らかにしようとしている事柄の一つは、人間にとつての自然的な愛である Affection, Friendship, Erosは自己充足的ではないこと、すなわち、自然的な愛はそれら自身のみによつては自らを善い状態に保つ力を有していないことである。自然的な愛が自然的と呼ばれるのは、それらの愛が人間の自然本性に何らか組み入れられている built-in とルイスが見做しているからである。また、自然的愛がそれぞれに有する固有の自然本性 nature が示されることによって、各々の愛が私たちのうちで善いものとなったり、悪いものとして人生を暗黒にする仕組みが解明されていく。自然的な愛は人間の生においてそれぞれ果たすべき役割を担っており、その役割が全うされるとき、私たちの生きることは人間らしいよきものとなる。それゆえ、ルイスは自然的な愛の価値を貶めようとする人々 debunkers に与しない。他方で、ルイスは自然的な愛のうちにそれらのみで人間の生を完成させる力があると考える人々 idolaters にも与しない。自然的な愛が絶対視されるときに、それらの愛は私たちのうちで悪魔に変わるとルイスは警告を発する。自然的な愛が善いものとして私た

ちのうちで生命を保ち続けるためには、それらの愛よりも高次の愛が何らか関与することが必要とされることが示唆される。この点に自然と恩寵、自然的な愛と超自然的な愛という、この著作の重要なテーマが関わっている。

ところで、これらによって示唆されていることは、愛はそれらの愛を有している人のその愛に対する評価によって、別の言い方をすれば、人が自らのうちに働く愛をどのように愛するかによって、その愛そのものの性質を変えることである。愛はその愛そのものに対する愛し方を問われる。このことが、ルイスがこの著作を書いたモチーフの一つであったと考えられる。

2 自然的な愛とその特質、栄光

ルイスは四つの愛についての考察を、さまざまな愛のうちで最もつましく広汎にいきわたっており、また、その愛における私たちの経験と他の動物たちの経験との異なりが最も少ない愛、すなわち、Affection から始めている¹⁴。Affection は親子に対する愛であり、子の親に対する愛を起源とする。ルイスは考えている。子どもが親のお世話によって成長することはこの愛にもとづく。したがって、人間を含めた多くの動物が子どもを育てることによって命を次世代へとつなぐこと、これを可能にしているのがこの愛であるという意味において、Affection は動物の本性 nature に組み込まれている愛である。この点に関連して、ルイスは重要な考察を行なっている。すなわち、親と子の間の養育・庇護の関係を成り立たせる Affection において、親から子への Gift-love と子から親への Need-love の相関関係は容易に見て取ることができる。しかし例えば、母親は胎内に身ごもった子を分娩できなければ死することになり、生まれた子に授乳できなければ乳が張って苦しむように、子どもを育てることは親にとって或る意味ではそうしなければならぬ自然の定めの中に置かれて見做すことができず。したがって、親の愛は確かに Gift-love であるが、しかしまた同時に、そのように愛を与えることそのものを親が求めて

いるという意味において、親自身における Need-love でもあることをルイスは指摘する。他面、親の Gift-love は、実際の愛の行為の実行に即してみるならば、子が親からの養育を求めることなしには成り立たない。したがって、親の Gift-love は子どもが親を求めることを求める側面を有するのであり、子どもに対する Need-love でもある。このように、親子関係の場合に顕著に見られる Affection の性質、すなわち Gift-love でありながら同時に根本的に Need-love でもあること、Gift でありながら必ずしも自由に与えるのではなく自らの必要による Gift-love であることは、この愛の倒錯現象を考えるうえで重要な鍵となる。

他方、Appreciative-love についてみると、Affection には「この要素が最も稀薄であることをルイスは指摘する⁽⁵⁾。Affection はその対象となる人が有する善さが私たちによって認識されることによってよりも、むしろ、誰かと偶々一緒にいる経験が重なることによって、私たちとその人とを結合してくれる愛なのである。それゆえ、この愛は年齢、性、身分、教養などの障壁 barriers に左右されない普遍性をもって広がり、人と人、人と動物、また種の異なる動物同志をも結びつける。

ところで、Affection の素晴らしさは「この愛が基本的には Appreciative ではないという正にこの点に由来することをルイスは指摘する。それは、この愛が Appreciative ではないがゆえに、却って結果的に私たちに Appreciation を可能にするところにある。Friendship, Eros においては、それぞれの愛の成立にとって Appreciation は重要な役割を果たしている。友人や恋人については、私たちはその人たちの持つ様々な善さ excellences のゆえに彼らを「選んだ」have chosen と言いうるからである。しかし、それらの友人や恋人の持つ様々な善さは、私たちの好む「特定の種類の」善さでなければならぬ。人の持つ様々な善さにかんして、私たちは personal taste を持っているからである。これに対して Affection は、偶々一緒に居合わせることがなければ互いに関心を持つことがなかったであろう人同士を結び付ける。しかし、Affection にもとづくこの交わりを通じて、私たちはその人のうちに「何か」があることに気づき始めるとルイスは言う。確かに彼は私の好みのタイプの人ではない。しかし、彼は「彼独自のあり方で」in his own way とても善い人なのだ⁽⁶⁾。このように Affection は私たちの

心を広げ、人間の善さにおける真に幅広の Appreciation を可能にする。Affection は偶々一緒に居合わせた人に対して、私たちに「気づき、辛抱し、微笑み、ついには味わう」ことを教えるとルイスは言う⁷⁾。

Friendship は natural loves のうちで「最も自然的でない」とルイスは言う。「最も自然的でない」というのは、本能的、有機体的、生物学的、群生的、必要不可欠などの点において乏しいという意味であるとされる。古代世界においては、あらゆる愛のうちで Friendshipこそは最も幸福にして人間に相応しいものと評価されていたのであり、人生の栄冠、徳の学び舎として尊ばれた⁸⁾。これと対照的に、現代世界は、Affection や Eros の重要性や美にかんしては過剰に誇張し繰り返し強調するのに対して、他方、Friendship については、確かに人は妻と家族の他に数人の友を必要とすると認めはしても、しかしその承認の調子は現代の人達にとって Friendship は人生における周縁的な事柄にとどまり、主要コースにはないことを示しているとされる。このことに関連して、古代中世において、その最深度を持続的に流れていた思想は禁欲的で現世否定的な調子を帯びており、自然や情念や身体を私たちの魂にとって危険なもの、あるいは人間の品位を貶めるものと見做す傾向があったのに対して、Friendship においてはそのような要因から遠ざかり、互いに自由を選ばれた人同士の、明るく静謐で理性的な関係が見出されると考えられていた¹⁰⁾。この時代の後に、ロマン主義や感傷を至上とする考え方が到来したのであり、この傾向は今に至っているという。

ところで、Friendship を自然的でないとするルイスの主張には当然次のような疑問が生じるのではないか。人間にとって共同体を形成して生活することが自然なことであるならば、そのような共同生活を善い状態で営ませる作用を有する Friendship もまた自然的なのであり、群生的本能のしからしめる働きではないのか、と。この疑問に対して、ルイスは Friendship を生み出す母体であるものと Friendship とを区別していることに注意しなければならない。私たちが同じ職場で力を合わせて働いて日々苦楽を共にすること、同じクラブに属して楽しみの時を共有することなど、私たちの共同生活において働いているものをルイスは Companionship と呼ぶ¹¹⁾。この Companionship を母体としてこの内から Friendship が生ずるのは、

Companion の中の二人かそれ以上の人が何らかの insight や interest を自分たちが共有していることを発見したとき——この insight や interest を他の人達は共有しておらず、またこの発見の時までは各々はそれらを自分だけの独自の宝物と信じていた——そのときであるとルイスは言う。それゆえ、Friendship が生まれるときの典型的な表現は「何ですって？ あなたもですか？ 私だけだと思っていましたのに」という形をとるとされる。¹²⁾ このように各人にとって密かで内的であり、かつ貴重な vision が共有されたとき Friendship は生まれ、またこのような貴重な vision の共有から芸術やスポーツ、霊的な宗教が生まれることもあるだろうとルイスは言う。

ところで、Friendship がもとになって、芸術や学問や宗教が形成される（例えば、数学は数や線などについて論じ合うために集まった a few Greek friends によって始まったとして）のならば、Friendship は共同体にとって unnecessary なものではなく、実際の効用や価値をもつのではないかとの反論が予想される。これに対してルイスは次のように答えている。Friendship は共同体に或いは貢献し、或いは反対に危険要素となるかもしれない。しかし、貢献する場合でも、survival value としてよりも寧ろ civilisation-value としてである、と。言い換えると、Friendship が共同体を助ける場合、それは共同体が「生きる」ためではなく「よく生きる」ためであり、しかも、この貢献は Friendship がそれを目指した結果であるというよりも、むしろ accidental な副産物としての結果であるとルイスは言う。¹³⁾ 或いはまた、「兄弟よりも頼もしい友人がいる」との言葉にあるように、Friendship は個々人の生存に極めて有用であり、なくてはならないのではとの疑問も提示されるかもしれない。この疑問に対しては、この主張の中では私たちは Friend という言葉を ally（盟友）の意味で使用しているのであり、Friend は通常の用法においては ally 以上のものを意味するとルイスは答えている。

さて、このように密かで内的でありかつ貴重な vision の共有が Friendship の中心を占めている限りにおいて、この vision を共有する人であれば誰であつても Friendship の輪に迎えられるのであり、他のメンバーもこのことを喜ぶとルイスは言う。Friendship の根源に働いているものは、各メンバーがその vision を共有しているところのその「何か」であると言うこと

はできないだろうか。もしそうであるとすれば、friendsの集いを招いているのは、彼らがそれを「視る」ことを欲し、またそれを「視る」ことを享受しているその「何か」である。その「何か」がそれ自体において豊かなものであればあるほど、Friendshipにおいて各メンバーは他の新たなメンバーの参入を喜ぶであろうと言われる。というのも、メンバーが増えれば増えるほど、各自はそれぞれ独自のvisionを互いの間において分かち合うことになるからである。それゆえ、様々な愛のうちでこの愛が最も嫉妬心から遠いとルイスは言う。¹⁵ この愛においては、分かつことは取り去るのではなく、むしろ反対に分かちあうことが愛を増し加えることになる。Friendshipの栄光はここににある。

3 自然的な愛、その倒錯

That our affection kills us not, nor dye.¹⁶

「我々の愛が我々を殺すことなく、また我々の愛が死ぬこともないように。」

本書の冒頭に掲げられたジョン・ダンの詩句は印象深く警告する。私たちの愛は適切な導き手を得ないならば私たち自身を滅ぼすものともなりうることが示唆されている。他方、そのような危険性を察知して、単にそれを回避しようとするならば、私たちは愛を抑圧し、死滅させることにもなりうる。愛は私たちの自然本性として与えられていながら、しかし、それを健やかなままに開花させることは殊の外難しいことが示されている。では、なぜ難しいのか。

私たちはこれまで、natural lovesにはそれぞれ固有の力・働きがあり、それらが善さを発揮するさまを見てきた。しかし、それらのnatural lovesが固有の善さを発揮するためには実は或る条件が満たされていることが必要だったのであり、その点には触れられていなかった。それは私たち自身の知と意志にかんすることがらである。

ルイスは人間的な愛 human lovesを庭園 gardenに喩えている。この喩えは極めて巧みなものであり、私たちはここから多

くを学ぶことができる。

庭園は自分で雑草取りや刈り込み、芝生ならしをしたりはしない。それゆえ庭園が美しく保たれるためには、園丁 *gardener* がこれらのお世話をしなければならぬ。庭園がその美しさを輝かせるために園丁が行うことは、或る意味では取るに足りないほど小さいともいえる。なぜなら、植物は自らの内なる生命力によって育ち、人間自身は決して作り出すことができない色と香りをもつ美しい花を咲かせるからであり、また、大地の豊饒さ、恵みの雨やふりそぐ太陽の光がなければ、園丁は何をもなしえないからである。自然が有しているこの美と活力と豊饒さに比べると園丁の務めは副次的で味気なく映るかもしれない。しかしそれでも庭園が乱雑に絡まり合った雑木林ではなく庭園であるためには、園丁の労多き務めは欠かすことができない。これと同様に、人間的な愛が成長し花を咲かせ実りをもたすためには、雨や日差しのように恩寵の助けがなくてはならないとしても、私たちの意志の労多き務めは欠かすことができないとルイスはいう¹⁷。

ルイスが自然的な愛を庭園に喩えたのは、庭園の植物がそれ自身のうちに自らを成長させる生命を有しているように、人間的な愛は或る自然的な能力、すなわち自らを発現させる力を自らのうちに宿していると見なしている点に求められよう。通常、私たちは親子の愛情などの様々な愛の働きを、私たち自身の心の自発的な働きとして理解しているのかもしれない。確かに、それは私たちの意識のうちに行われることであり、私たちの心の働きなしにはあり得ない面がある。しかしそれ以上に、ルイスにとつて人間的な愛の働きは、根源的には私たちのうちに組み込まれている様々な愛の自然本性的な発現として理解されているように思われるのである。しかし他方で、この自然本性的な愛は私たち自身の意識的な働きかけなしには発現しない。そこに園丁に喩えられて私たちの意志 *will* が語られている意味を読み取ることができる。庭園がその自然本性を発現させて美しい庭園となるか否かが園丁の配慮にかかっているように、自然的な愛がその自然本性を発現させて人間的な生が可能となるか否かもまた私たちの意志的配慮にかかっていると理解することができる。

私たちの意志の労苦ある働きが必要とされているのは、本来的には輝かしいものになりうる庭園が園丁の労苦なしには藪

と化するように、本来的には善きものである自然的な愛は意志的勞苦なしには倒錯する傾向性があると見做されているからである。しかし、この倒錯への傾きはそれぞれの愛の自然本性と結びついているのである。そうであるならば、自然的な愛の倒錯を防ぐためにまず行ふべきことは、自然的な愛自身がどのような悪化への傾きを有し、それゆえ自己充足的ではないのかを私たち自身が知ることであると云えるであろう。

Affection の倒錯現象としては、次のことがらが指摘されている。先に見た如く Affection は親子間の養育關係を源としており、生命維持的な意味合いにおいて自然的・本能的な性格を色濃く持つ。この Affection の働きによって、親は子をいわば自然に愛し、子は親を自然に愛するように促される。しかし、この自然の促しがあるとしても、私たち自身の意志的な努力が不必要となるわけではなく。Affection の持つ或る種の自然性が誤解され、子どもから慕われるような行いを自らが行っているか否かを親が問わず、子どもは親を愛するのが当然だと考えるならば、その傲慢さによって親は子どもからの愛を失うであろうが、親自身のうちに自らのあり方への反省がなければ、かえって子どもを責めることにもなるであろう。

また、親の子に対する Gift-love は、具体的な行為としては子どもが親を求めることによってしか成立しないがために、親は子どもに対して自らが求められることを求める need to be needed ことになる。しかし、このような仕方での親から子どもへの need-love の要求は、時に子どもにとっては重荷となる貪欲な愛の要求になり、また、子どもの自由な行動を制限するような事態をも生む。しかし本来、親が子どもを養育するのは子どもが自分で自分を養うことができるようになるためである。この愛において与えることの目的は、与えられる人がもはや与える人を必要としない状況に導くことにある。従って、ルイスはこの Gift-love には重い使命が課せられているという。この Gift-love はやがて訪れる自ら身を引くべき時のために働かなければならない。彼らはもう私を必要としないと私たちが言える時が私たちが報酬でなければならぬ。しかし、この愛はその自然本性自体では、この法を全うする力がないとルイスは指摘する。本能的な欲求は相手にとつての善いことを望むが、端的にそうなのではなく、その善が自らが与えることができる善である限りで望むのだからである。それゆえ、より

高次の愛、すなわち、相手にとつての善を、それ与えるのが誰であるかにかかわることなく端的に望む愛が介在することによって、本能的な愛の立ち退きを助ける必要があるとルイスは指摘する。⁽¹⁸⁾ここに自然本性的な愛が健全な仕方でも働くためにはそれ自体では不十分であり、より高次の愛すなわち恩寵の扶助によって可能となる愛へと私たちが導かれる必要性が示唆されている。

Friendship のもつ両個性にかんしては、この愛が善人たちをより善き者となし、悪人たちをより悪しき者となすことは一般的に認められていることであり、詳論の必要はないとされる。問題とされるべきは、善い Friendship のうちに潜む危険性である。Friendship の中心に働いているのは Appreciation であり、他の人々からは顧みられていない、密かで内的で、かつ貴重な vision の共有によって Friendship は生まれた。それゆえ例えば、文学や芸術にかんする何らかの vision の共有によって生まれたサークルは、自らとその他の人々との間に一線を画することになる。サークルのメンバーは、自らの外部にいる人の意見に耳を傾けることはないであろう。このような態度は当の文学や芸術の領域に限ってみれば何らか避けがたいことであるとしても、しかし、この態度は文学や芸術以外の事柄にも容易に波及しうる。Friendship はそれ自身の性質によって、或る特定の事柄にかんしてサークルと部外者を生み出すことになるが、この部外者は容易に領域の限定を失つて一般的な部外者になる危険性を持つている。しかも、部外者に対するこのような態度はサークルに属する人々たちの或る種の優越性に基づくものであるから、この優越性も容易に特定の限定性を失つて、全般的な優越意識に変化しやす。このように、Friendship は部外者に対する無視と軽蔑を含んだものへと悪化する危険性を有するとルイスは指摘する。⁽¹⁹⁾

この愛とそれが高慢に陥る危険性はほとんど分離できないと言われる。さらに、共有されている vision がかわっている事柄が高慢なものであればあるほど、この危険は重大化する。この愛において私たちは各々の insight によって他のメンバーの価値を見出して互いを選んだのだと、言い換えれば、私たちは私たち自身の有する力によって他の人々よりも高みに上っているのだと考えがちだからである。⁽²⁰⁾ここにおいてもまた、natural love としての Friendship がこのような病的状態をのがれ

るためには、より高次の愛のかかわりが求められることをルイスは示唆している。キリストは弟子達に言う、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(『ヨハネによる福音書』15、16)。より高次の愛のかかわりにおいて Friendship の意義が新たにされる。すなわち、この愛は私たちが互いを Friends として見出す際に働かせている識別力への「報償」ではなく、むしろ、この愛はこれを通じて神が私たちに他の人たちの持つ様々な美しさを開示なさる「道具」であることが示される。²¹⁾ 言い換えるならば、この愛において私たちは自分たちの能力を誇るべきではなく、むしろこの愛をうじて私たちは互いの善さを輝かせる務めを果たすべきであることが示唆されている。

4 Charity

以上の倒錯現象についてはそれぞれの愛に固有の要因が作用しているが、しかし或る共通性も見て取ることができる。その一つは、自然的愛は善悪画面に作用しうる不完全な愛であり、私たちの意志的な努力が必要であるにも関わらず、そのことが必ずしも十分に私たち自身に認識されていない点である。しかしその反面、このことが十分に認識されると、人は自然的愛の経験において、自らに對していかなる種類の優遇をも与えてはならないことなどを学びかつ実践することによって、道徳的に向上しうる。²²⁾ もう一つは、自然的な愛が高まり善い状態にあるとき、この愛が私たちにとつての最高の愛であるかのごとき幻想を抱かせる危険性が生じている点である。

では、ルイスは自然的愛と全き愛である愛御自身 Love Himself との関係をとどのように理解していたのだろうか。
「The highest does not stand without the lowest.」²³⁾「最も高きものは最も低きものなしには立たない。」

本書の中で繰り返し登場するこの言葉は、ルイスの思考の導きとなつているキーセンテンスであろう。含蓄に富み多様な解釈の可能なこの言葉を頼りにすると、今の問題を次のような仕方で表現できるのではないか。すなわち、低いものは自ら

が低いものであるとの自覚を伴わないとき、知らず知らずのうちに自分を高いものの座につけるといつたことが起こる。したがって、低きものは高きものに出会うことによって初めて自らが低きものであることを知り、この認識によって低きものの中で高きものが立つのである、と。そうであるならば、自然的愛と愛御自身との関係についての認識は、私たちが全き愛である愛御自身に何らか触れることによって十全化されていくと考えられるのではないか。そして私たちが愛御自身に何らか触れることが可能になるのは、愛御自身が自らを私たちに示されることによってであると思われる。

さて、自然的愛と愛御自身との関係についての考察は、創られたものとしての人間の神への愛からではなく、本当の始め *the real beginning* である *Divine energy* としつゝの *love* から始められている。この第一の愛 *primal love* は *Gift-love* であるが、満たされるべき *need* を持たず、ただただその豊かさのゆえに与えることを欲するとされる。神は創造に耽り、如何なる必要性のもとにあったのではなく、全くの余剰物としての被造物を存在へともたらすことを愛される。この愛御自身が全ての愛の創設者であるとされる。ここから、私たちの自然的愛における全ての *Gift-loves* は、この第一の *Gift-love* の *natural images* として理解されている。他方で、*Need-loves* は *Gift-loves* に対する相関者として位置づけられる。しかし、神はこれらよりも遥かにすぐれた賜物を私たちに授けるといふ。すなわち、神は自身自身の *Gift-love* を私たちに分かち与える。これが恩寵として授けられる *Charity* であり、超自然的な愛としつゝの *Gift-love* と *Need-love* であるとされる。この愛が *natural loves* よりもより恵みの大きな愛であることは次の点において見ることができぬ。

自然的 *Gift-loves* は先に見たように、確かに相手にとつての善を望むが、端的にそうなのではなく、その善が自らが与える善である限りで、或いはその善が与え手自身にとって好ましい善である限りで望む、などの制約のもとにある。これに対して、人のうちにおいて働く愛御自身であるところの神的 *Gift-love* は、与え手の利害を全く超えて、ただ相手にとつての最善を欲するとされる。また、自然的 *Gift-loves* が対象に向けられる場合、その対象は与え手にとつて何らかの仕方ですべて自体において愛しうるもの *lovable* として把握されている必要がある。これに対して、神的 *Gift-love* は人をして自然的な仕

方においては愛しえない対象を愛することを可能にするとされる。²⁵そして、このような愛は私たちにとっては全くの恵みであり、私たちの自然的な能力を超えているものでありながら、しかし私たちにとって必要なものであるがゆえに、神は私たちのこの求めNeedの有り様を私たち自身による認識へともたらずことにおいて、神御自身に対する超自然的なNeed-Loveと私たち相互の超自然的なNeed-Loveをお与えになるとルイスは言う。²⁶

さて、以上から自然的愛と愛御自身との関係についてこれまでよりも理解を進めることができるのではないか。愛御自身という光の照明によって、私たちは自然的愛が低きもの、制約された愛であることを何らか認識する。また、この照明のもとで、私たちはCharityというgiftへの私たちの求めを認識するに至るといえよう。そして、私たちがCharityという愛を恵みとして戴く時、私たちの自然的な愛はその本来の姿を実現する。というのも、自然的な愛の悪化への傾きは、これらの愛の経験において私たちが自らを高しとするところに見出されたが、Charityは私たちに自然的愛の要求よりも愛御自身の促しが尊重され優先されるべきであり、私たちの意志は愛御自身に従うべきであることを教えると思われるからである。このとき自然的愛は無用なものとして廃棄されはしない。Charityの到来によって自然的愛は自らの本来の働きを存分に発揮する。*The Four Loves*という題名が意味するところは「このこと、すなわち、私たちの自然的な愛である Affection, Friendship, Eros はCharityの到来を待ち望んでおり、Charityが到来することによって、それらの愛は然るべき秩序の下に配されてそれ自身の働きを実現する。それゆえ、このタイトルには、私たちの愛はThe Four Lovesという形の秩序を求めているという意味が込められているように思われるのである。

ところで、自然的愛と愛御自身との関係についてのルイスの考察は以上に尽きるであろうか。少なくとももう一つのことに触れておかなければならない。これは自然的愛がそれ自身に留まりながら、Charityの状態で転じるように命ぜられることについてである。キリストが真の神であり真の人であられたように、自然的愛も真のCharityであり、かつ真の自然的愛であることを求められることがあるとされる。²⁷このことがどのように生起するのかはほとんどのキリスト者は知っている

イスは言う。自然的愛の営みは（罪のみを除いて）すべて、恵まれた時にあつては、喜ばしく感謝に満ちた Need-love であり、差し出がましくなく利益を求めない Gift-loves であつて、それらの愛はまた Charity であると言われる。為されることはほんの小さな事柄であつてよい。一つのジョークでも少しの散歩であつても、その行いは私たちが人を慰めたり、人と和解したりするものとなりうると言われる。しかし、このような恵まれた時はすぐに過ぎ去るのであつてみれば、自然的愛を全体として Charity の佇まいに転ずることは私たちにとつて極めて困難であり、完全にそれを成し遂げることは不可能なことにも思えよう。しかしそれでも行われなければならないとされる²⁸。

このような Charity の受肉 incarnation としての自然的愛についてのルイスの説明を見よう。いざこざや諍いの絶えないなかで私たちは生きています。私たちは自然的愛をめぐつて様々な軋轢や挫折に苦しむが、しかしこれらの経験こそは自然的愛が Charity に与るための招きであるとされる。私たちは互いを許し合い、認め合わなければならない。

「私たちが子ども達とトランプ遊びをすることが、ただ単に merely 彼らを楽しませるためか、彼らが許されていることを示すためだけであるとしたら、私たちはまだ十分ではないかもしれない。もしこのことが私たちの心なしうる最善のことであるなら、そうすることは正しい。しかし、もし Charity がより深くより意識しない仕方で私たちの心を導いて、このような場面では子どもたちとの小さな楽しみをもつこと、それが私たちが一番好きなことだという心のあり方になればもつと善い。」²⁹ここでルイスの用いる喩えの卓拔さが光っていると思う。親と子どもという或る種の不均等に基づく状況設定は、私たちの行う赦しのあり方が、均等な人間関係におけるそれよりも、より多くの配慮と好意に導かれたものであるべきことを示している。

ここで対比されている二つの赦しのあり方の違いはどのような点に見られるであろうか。前者の赦しになくて後者の赦しにあるもの、それは私たち自身このような場合のトランプ遊びが好きだということである。「好き」という心のあり方は、後者においては前者において以上に、赦しの行為と私たちの意志が深く一致しているところから生じていると理解することが

できる。しかし、このような行為と意志との一致は、この意志が単なる一時的な感情や気分ではなく、私たちのうちに何らか持続的に保持されていた意志であったところから実現していると言えよう。これは別の言い方をするならば、前者の場合、赦しはその時々々の個々の行為として生じているのみであるのに対し、後者の赦しは確かに具体的な行為としてはその時々々のことであっても、私たちの赦しの意志はそれを発現するべく待っていたのだと言えよう。それゆえ、個々の意志に先立って私たちの心は何か「原一赦し」とも言うべき心のあり方にすでに導かれていたと考えられるのであり、この導き手が Charity だとされているのである。それゆえこのとき、私たちはもはやトランプ遊びをことさらに私たちによる赦しの行いであるとは思わないであろう。私たちが Charity に導かれてトランプ遊びをするとき、トランプ遊びは「赦し」として私たちが行なうことである以上に「愛」の賜物として私たちに受け取られているのである。

「私たちが神の御顔を拝する時、私たちは神をいつも知っていたことが分かることだろう。私たちのすべての地上的な無垢な愛の経験、これらの主催者であり、これらの経験を内からお造りになり、支え、動かしておられたのは神である。それらの経験のうちにあつて真の愛 true love であつたところのすべては、地上においてでさえ、私たちのものであるよりは遙かに神のものであつたのであり、神のものであつたからこそ私たちのものであつた。」³⁰

この言葉はルイスの信仰を端的に表している。ルイスにとつて、私たちの無垢な愛の経験はそれがたとえどれほど小さなものであつたとしても、すべて根源的には神からの賜物としてあつたのである。だからこそルイスは、私たちが愛を経験している限りについて「私たちは神をいつも知っていたことが分かることだろう」と言うのである。たしかに、個々の経験において、愛するのは私たちである限り、愛は私たちの心の働きであり、私たちの意志なしではない。しかし、この愛を善い愛とし、無垢な愛として形作られて、欲びのひと時として私たちにお与えになつたのは神に他ならない。その意味において、この愛は私たちから発しているという以上に「神の善」の分け与えであつた限りについて「私たちのものであるよりは遙かに神のものであつた」。他方、この愛は「神の善」の分け与えである限りにおいて、私たちにとつては自らの分を超えた賜物

であったが、しかし、この賜物は惜しみなく自らを分かち与える「まことの与え主」である愛御自身のものであったからこそ、私たちに無垢な愛として恵み与えられたのだった。それゆえ、この愛は「神のものであったからこそ私たちのものであった」と言われるのである。

人を救すことそのものは本来私たちのなすことではなく愛御自身の御業に他ならない。しかし、恩寵の恵みのうちで Charity に導かれて、私たちは救しを愛として行うことへと招かれているとルイスは考えている。The highest does not stand without the lowest. 私たちにとって Charity は natural loves よりも遙かに高みに位置する愛であると言えよう。しかし、高みに位置するこの愛は、或る意味では全く逆説的にも、キリストのように慎ましくただひたすらに自らを低くして私たちに救いをもたらされる、そのような姿をしているように思われるのである。

註

- (1) C. S. Lewis, *The Four Loves*, Harcourt, 1988
- (2) *Ibid.*, p1
- (3) *Ibid.*, p1
- (4) *Ibid.*, p31、なお紙幅の都合上、本論文では Eros については論じない。
- (5) *Ibid.*, p34
- (6) *Ibid.*, p36
- (7) *Ibid.*, p37
- (8) *Ibid.*, p58
- (9) *Ibid.*, p57
- (10) *Ibid.*, p59

- (11) *Ibid.*, p64
- (12) *Ibid.*, p65
- (13) *Ibid.*, p68-9
- (14) *Ibid.*, p62 ルイスはこのことにかんして『イザヤ書』(6・3)の天使たちの交唱に注意を喚起している。
- (15) *Ibid.*, p61
- (16) John Donne, *A Litany*, 27
- (17) C. S. Lewis, *op. cit.*, p117
- (18) *Ibid.*, p50-1
- (19) *Ibid.*, p82
- (20) *Ibid.*, p89
- (21) *Ibid.*, p89-90
- (22) *Ibid.*, p43
- (23) Thomas à Kempis, *De Imitatione Christi*, II, 10, 4
- (24) C. S. Lewis, *op. cit.*, p126
- (25) *Ibid.*, p128
- (26) *Ibid.*, p129-30
- (27) *Ibid.*, p133-4
- (28) *Ibid.*, p134
- (29) *Ibid.*, p135
- (30) *Ibid.*, p139

(熊本保健科学大学・教授)